

## 「重誓偈」における一、二の問題

——『梵文無量寿経写本集成』所収の「榑本」によって——

畝 部 俊 英

### はじめに

「龍谷大学善本叢書」の一冊として『梵文無量寿経写本集成』（井ノ口泰淳責任編集、1986年、以下『集成』と略称）が出版されてより今年（1991年）で既に5か年が経過している。この間、本『集成』に収められている諸写本、特に龍谷大学図書館所蔵ネパール写本の榑本に多大な恩恵を蒙っている一人が筆者である。『集成』出版の労を取られた方々に敬意と謝意を表わしたく、拙い論文ではあるが、一文を草する次第である。

1965年、足利惇氏博士によって、この榑本を底本とする刊本（以下、足利刊本と略称）が世に出されたことは、それに先立って、1883年に出版されたオックスフォード刊本、並びに1929年に出版された大谷刊本と共に〈無量寿経〉の原典研究にとって画期的なことであったが、これらの刊本の底本と対校本に用いられた写本や世界各地に散在するその他の写本そのものは、これまで極めて限られた人々のみが直接手に取り、また間接的に写真やマイクロフィルムなどにより読むことができたにすぎなかった。それが、30数種は現存すると数えられている『無量寿経』写本<sup>1)</sup>のうちでも、ほぼ完本であり、しかもコロフォンに見える王の名前によれば、12世紀中葉の写本と推定されていて<sup>2)</sup>、最古の写本の一つと目される榑本が図版とはいえ、

「重誓偈」における一、二の問題

『集成』の出版によって、原写本を手にとって見るように、披見できるようになった。まさに『集成』の「はしがき」に「本書を刊行することによって、何人の利用も、また活字化された文章のみでは不可能であった写本との対照、検討も可能になることと思う。」と述べられていることが、現実のものとなったのである。

そこで、この図版のいくつかの梵文写本を読みくらべてみて感ずることは、やはり『集成』の「はしがき」にあるように、「写本はその文献的価値の大小にかかわらず、それぞれ一つの有機的な生命をもつもの」であるということであり、これまで先覚の方々がオックスフォード刊本や足利刊本の、改訂すべき語句や個所についていろいろ意見を出して、それにはそれなりの理由や根拠もあることではあるが、写本そのものを目前にしてみると、それぞれの写本を軽々には改訂できないのではないかということである。ある一つの写本には、その写本なりの考え方があるのであって、先ずそのことを、その写本の側に立って考えてみる必要があると思われる。改訂すべき点があるとすれば、その後に行われるべきである。

書写年代が古い、他の刊本には見られないすぐれた点が認められている榊本の場合には、尚更、以上のことがあてはまるような気がする。この点について、榊本の「重誓偈」最初の方の一、二偈を例に取って、これまで諸学者によって刊本の原文が改訂されて、訳もそれに従って行われている個所に関して、榊本そのまま読むことができると思われるので、そのことを取り上げてみたい。

「重誓偈」第1偈は、足利刊本によれば、

saci mi imi viśiṣṭa naikarūpā

「重誓偈」における一、二の問題

varapranīdhāna siyā khu bodhiprā [26a] pte,  
ma ahu siya narendra sattvasāro,  
daśabaladhāri atulyadakṣiṇīyaḥ. (1)

(*Sukhāvaiṣyūha*, ed. Atsuuji Ashikaga (以下, *Sukh.* と略称), p.21, ll.16–19.)

となっている。

これを『集成』所収の榑本と対照してみよう。

saci mi imi viśiṣṭa naikarūpā varapranīdhāna śiyā khu bodhiprāpte /  
māhu siya narendra satvasāro daśabaladhāri atulyadakṣiṇīyaḥ //

(『集成』, p.16, 25b, l.4 – p.17, 26a, l.1.)

見安いように、字句だけは切り離してローマ字に写し変えてみた。Puṣ-pitāgrā の偈頌であるが、足利刊本では、先に掲出したように四行に行を改めてある。一般的に写本では、長行の部分も偈頌の部分も、一葉一葉の表裏 (a と b で表示) 各行に (貝葉本の場合には、紐を通す穴の周囲を余白に残して) 文字がびっしり書き込まれているから、長行と偈頌はちょっと見ただけでは区別がつかない。オックスフォード刊本、大谷刊本、足利刊本は共に「歎仏偈」や「重誓偈」を四行に行を改めて、番号を付し一偈一偈を明示しているが、これは刊本校訂者が意図したものである。

さて、足利刊本と榑本と違うところを見よう。

足利刊本では、2行目に、

varapranīdhāna siyā khu bodhiprā [26a] pte,

とあるが、榑本では siyā となっている。siyā であれば、pāli と同じく  $\sqrt{as}$  (ある, なる) の可能法 (optative) ・為他 ・3 人称 ・単数であり、 $\sqrt{si}$  (満足させる) の可能法 ・為他 ・3 人称 ・単数である。

榑本以外の写本、オックスフォード刊本、大谷刊本が共に siyā となっていること、チベット語訳が siyā に近い訳をしていること、ネパール写本が ś と s を混同するという一般的な傾向を有するなどの理由によってか

「重誓偈」における一、二の問題

もしれないが、榊本を底本とする足利刊本までが *siyā* にしているのは、どうしたことであろうか。しかも、その理由は刊本に示されていない。

榊本では、「重誓偈」第1偈は25b (『集成』 p.16) の最後の行である4行目中頃から始まり、そこに *śiyā* の語があり、26a (『集成』 p.17) の1行目に移るとすぐの所に、

māhu siya narendra satvasāro

とあって、ここには文字どおり *siya* という語が出てくる。紐が通されている貝葉本の25bと26aは上下に並べてみれば、上の行とそれに続く下の行という関係になる。もし *śiyā* が *siyā* であるならば上の行で *s* を *ś* と混同し、続く下の行では混同していないことになる。また第1偈の最初の方を見ると、

śaci mi imi viśiṣṭa naikarūpā

とあって、*viśiṣṭa* では *ś* を *s* と混同してはいない。

*s* を *ś* と混同している例は、確かに榊本にも認められるが、足利刊本2行目の *siyā* は、榊本によるかぎりは、すなおいに *siyā* とそのままに読む方が、少くとも筆者にはよいと思われる。

榊本を底本とする梵文『無量寿経』の全文を刊本として出される以前に、足利博士は二つの論文<sup>3)</sup>で、榊本「重誓偈」をローマナイズして紹介している。それらを見ると、第1偈において、*śiyā* (足利博士は *ṣiyā* とあらわす) と *siya* とは、はっきり区別して写されている。特に二つの論文のうち、「大無量寿経重誓之偈の梵文について」においては、榊本の紹介、ローマナイズした「重誓偈」の梵文、くわしい注記、そして最後に邦訳を試みている。その注記③を見てみると、

他の版に於ては凡て *siyā* = Skt. *syāt* の形を取ってゐるが、榊本は明らかに *ṣiyā* と読まれる。然らば *ṣiyā* は  $\sqrt{ci}$  = to satisfy の為他三人称単数可能法の形と見る可きであり、従つて支那訳の「斯願不満足」

「重誓偈」における一、二の問題

の文の「満足」の語に正に符合するわけである。

と述べている。

足利博士は、この論文では *siyā* と榊本どなりに転写し、その語根を  $\sqrt{si}$  = to satisfy と理解しているのであるが、刊本では *siyā* となっている。刊本のこの個所が誤植でなければ、足利博士の見方が *siyā* から *siyā* へ変わったのであろうか。いずれにしても、榊本そのものは *siyā* となっている。

オックスフォード刊本、大谷刊本、更に足利刊本が、すべて *siyā* となっているのであるから、足利刊本が出版されて以後、この刊本にもとづく、いくつかの和訳が出されているが、榊本の *siyā* はまったく問題にされていない。

一、二の例をあげてみよう。

(1) もしも、実に、[わたくしが] 覚りを得たときに、

このようにすぐれた、これらの最勝の誓願が、わたくしにないならば、  
人中の王よ、わたくしは、十力を持ち、無比の供養さるべき者、生ける者の最上者とはなるまい。(アンダーラインは筆者、以下同じ)

(藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』第2刷、1979年、p.73.)

ここでは、アンダーラインの個所に見られるように「…これらの最勝の誓願が、わたくしにないならば」と訳されたり、

1 わたくしが覚りを得た後に、

もしもこのようにすぐれたこの最上の誓願が (願ったとおりにかなえられ) ないならば、

人々の王 (= 仏) よ、わたくしは、十力を持ち、比べるものもなく、  
供養さるべき者なる生ける者の精粹 (= 仏) とはなりませんように。

(中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経』(上)、岩波文庫、第25刷改訳発行、1990年、p.49.)

とあって、「(願ったとおりにかなえられ) ないならば」と ( ) で補っ

「重誓偈」における一、二の問題

で訳さなければならないようになる。

これに対し、先ほど紹介した論文によって、*siyā* を  $\sqrt{\text{śi}} = \text{to satisfy}$  の為他・三人称・単数・可能法の形と見るべきことを述べている足利博士の和訳は、

- (1) まことにわれ覺りを得たる時、もしこの変りなき最上の願にして 満足 さすことなからば、人主よ。われは十力をもち無比の供養せらるべき勝れたる有情とはならざらむ。

とある。

拙訳も足利訳とほぼ同じであるが、次のようになる。

[わたくしが] 実にさとりを得たとしても、もしもわたくしの、このような<sup>4)</sup>、すぐれた、これらの最上の諸誓願<sup>5)</sup>が [衆生たちを] 満足させる<sup>6)</sup> ことがないならば、わたくしは、人間たちの主、衆生たちの最上者、十力を有する者、無比の、供養に値いする者とはなりません。

榊本の *siyā* とあることをそのまま認めて訳すと、このようになるのであるが、更に意味内容の点で、この第1偈は第2偈と対応しているように思うからである。すなわち、第1偈のこの個所における「これら最上の諸誓願が [衆生たちを] 満足させること」とは、どんなことか、その具体的内容が第2偈にあらわされていると見るのである。第2偈は、次のようである。

saci mi siyā kṣetra evarūpaṃ  
bahu-adhanāna prabhūta divyacitraṃ,  
sukhi na nara kareya duḥkha-prāpto,  
ma ahu siyā ratano narāṇa rājā. (2)

(*Sukh.* p.22, ll. 7-10)

もしも [わたくしが願った] このような、わたくしの国土が、多くの貧しい者たちにとって、天の輝ける豊かなものとならず、

「重誓偈」における一、二の問題

苦しみにおちいった人間を安楽な者になしえなかったならば、<sup>7)</sup>

わたくしは人間たちの宝石である王（＝仏陀）とはなりません。

すなわち、「わたくしの国土が、多くの貧しい者にとって、豊かなものとなり、苦しみにおちいった人間を安楽な者になしうる」というように、物質的・精神的な要求を「満足させる」ことが、第1偈の「これら最上の諸誓願が〔衆生たちを〕満足させる」とあらわされている具体的内容に含まれていると見るができると思う。

とすれば、漢訳の『無量寿経』並びに『如来会』の第1偈の「満足」、または「満具」とあることとは、意味が違ってくることになる。すなわち、『無量寿経』（流布本）では、

我建超世願	必至無上道
斯願不満足	誓不成正覚

※(1)至＝志 宋版（福州版、思溪版）、磧砂版、元版

※(2)足＝具 敦煌本（北京本鱗39、龍大本）、宋版（福州版、思溪版）、磧砂版、元版

※(3)正＝等 敦煌本（北京本霜28、鱗39、谷大本）、房山石経、高麗版、金蔵、宋版（福州版、思溪版）、磧砂版、元版、明版  
（以上の対校については、「諸本対照表」（藤田宏達『大無量寿経講究』所収）による。）

（『真宗聖教全書』一（三経七祖部）、13頁）

とあり、これを『真宗聖教全書』本では「斯の願満足せずば 誓ひて正覚を成らじ」と読み、香月院は「一願でも欠目なく満足せん。若し一でも欠けなば正覚取らじとなり。」<sup>8)</sup>と解釈し、この「重誓偈」第1偈によって本願の満足、すなわち成就を重ねて誓うという、「重誓偈」全体においても重要な偈頌であるとするのである。

ところで、この第1偈について、香月院は上の解釈に続けて、次のよう

「重誓偈」における一、二の問題

な疑問を出している。

時に誓不成正覚とあるからは仏果に至るに違ひなし。仏果に至れば四十八願成就は知れたことぢやに。上の句に必至無上道と云ひながら。次の句に斯願不満足とあるは云何ぞなれば<sup>9)</sup>

と。そして次に

これが誓の言なり。決定仏果に至るに違ひなし。去りながらたとひ仏果に至らうとも。若し此四十八願一願でも満足せずんば。我は仏果に至らずとの御誓なり<sup>10)</sup>

と答えているが、この第1偈に疑問を立てたことが知られる。

これに対し、榊本の *siyā* によって導き出される、「これら最上の諸誓願が〔衆生たちを〕満足させることがないならば」というのは、誓願の満足・成就を重ねて誓うのではなく、衆生たちの物質的・精神的要求を「満足させる」ということである。誓願が真に具体化・現実化するということは、本願成就の世界が一切衆生のいかなる志願をも「満足させる」という利他にあると言うのである。

なお、『如来会』第1偈においても、

今対如来発弘誓 当証無上菩提日  
若不満足諸上願 不取十力無等尊  
(『真宗聖教全書』一、194頁)

とあって、「もしもろもろの上願を満足せずば」と普通読まれている。

二

次に「重誓偈」の第3偈を見てみよう。

足利刊本(1965年)によれば、

saci mi upagatasya bodhimaṇḍam,



「重誓偈」における一、二の問題

daśadiśi pravraji nāmadheyu kṣipraṃ  
pṛṭhu bahava anantabuddhakṣetrām,  
ma ahu siyā balaprāptu lokanātha. (3)

(*Sukh.* p.21, l.24—p.22, l. 2)

となっている。榊本では、

saci mi rūpagatasya bodhimaṇḍaṃ daśadiśi pravraji nāmadheyu kṣip-  
raṃ /  
pṛṭhu bahava anantabuddhakṣetrām māhu siyā balaprāptu lokanātha //  
(『集成』, p.17, 26a, ll. 2—4.)

とある。

この第3偈において問題となるのは、pravraji という語であり、しかも従来の英訳や和訳は na という否定辞が脱落したものと見ていることである。

すなわち、オックスフォード刊本(1883年)に、

daśadiśi pravraji nāmadheyu kṣipraṃ<sup>10</sup>  
(梵蔵和英合璧『浄土三部経』(『浄土宗全書』23 所収) 46頁)

とあり、その注10に na seems to be wanted とあるのに従って、南条博士は、  
若シ我レ道場ニ近ヅケル後、名声速カニ十方ノ广大無辺ノ諸覚者国ニ  
達セズンバ、我ハ有力ナル世主トナラザルベシ。

(『支那五訳対照・梵文和訳仏説無量寿経 支那二訳対照・梵文和訳仏説阿弥  
陀経』102頁)

と訳し(1908年)、冠注に、

梵本ニハ達シ得ザルヲ得ルニ作ル、然レドモ那ノ字ヲ脱セルモノ、如  
シ 故ニ今ハ之ヲ加ヘテ訳出ス、英訳モ亦然リ

と述べている。

大谷刊本(1929年)では、韻律を無視して、

「重誓偈」における一、二の問題

daçadıçi (na) pravaji nāmadheyu kṣipram /

(『無量光如来安樂莊嚴經』42頁)

と ( ) の中に na を加えているが、この na は底本にはなかったことは明らかである。

オックスフォード刊本を修正した荻原博士も、その「梵本無量寿経本文刪修」(1931年)の(84)において、

此の行に na の一字を脱せることは西藏訳に依らずとも明瞭なり、此の字無くば意義を成さず、然らば詩法を犯さずして na を加へんとせば na を以て pravaji の pra に代ゆるの外途無かるべし。<sup>11)</sup>

とまで断言している。これ以後に発表された和訳は、これらの説を踏襲して、今日に至っている。従って、藤田博士の「梵文補正表」(1975年)においても、<sup>12)</sup> pravaji にかえて na vraji を指示している。

ところで、先に見たように榊本は pravaji とだけあって、na はない。オックスフォード刊本、大谷刊本に用いられた写本も『集成』所収の写本も、この点では一致している。

写本に na がないということは、現存の、最も古い写本が12世紀とすれば、それ以前に脱落したと考えることもできるかもしれないが、現存の写本を尊重し、写本の側に立って再考してみることも必要ではなからうか。現存の写本に na がないということは、それなりの意味があることを告げているように思われる。

そこで、pravaji という動詞の意味を改めて問うてみる必要があるとなってくる。

英訳も和訳も pravaji または vraji を「達する」の意味に決めて理解し、それだけでは意味が通じないから na を補足しているのであるが、果してそれでよいのかということを考えてみたい。

pravaji (pra- $\sqrt$ vraj) の意味を考える参考となるのが、漢訳『無量寿経』・

「重誓偈」における一、二の問題

「重誓偈」の第3偈である。次のように訳されている。

我<sup>※(1)</sup>至成仏道 名声<sup>※(2)</sup>超十方  
究<sup>※(3)</sup>竟靡所聞 誓<sup>※(4)</sup>不成正覚

※(1)至=志 敦煌本（龍大本）

※(2)声=聞 敦煌本（北京本霜28）

※(3)所=不 敦煌本（北京本鱗39），高麗版，金藏，明版，清版

※(4)正=等 敦煌本（北京本辰10〈剝落〉，霜28，鱗39，谷大本），房山石経，宋版（福州版，思溪版），磧砂版，元版，明版，清版

（以上の対校については，上記，藤田宏達「諸本対照表」による。）

（『真宗聖教全書』一，14頁）

この『無量寿経』の底本となったテキストがいかなるものであったかは不明であるが，内容が現存梵文の「重誓偈」とよく一致していることは一見してわかる。ただ「究竟靡所聞」（ここに否定辞 na に当る靡がある。また敦煌本（北京本鱗39），高麗版，金藏，明版，清版では所聞の所が不となっていて，二重否定となり，肯定表現となっている。）の個所だけは，現存梵文には対応するものがない。しかし，これは前の「名声超十方」の「超」の意味をあらわすために，訳出者が補足したものと見れば，この「究竟靡所聞」の個所が，現存梵文に対応するものがなくても問題はない。そして，これまでの読み方は，たとえば『真宗聖典』（真宗大谷派）を例に取ると，

我，仏道を成るに至りて，  
名声十方に超えん。  
究竟して聞ゆるところなくは，  
誓う，正覚を成らじ。<sup>13)</sup>

「重誓偈」における一、二の問題

としてきたのであるが、「究竟靡所聞」を「超」の補足説明の個所とするならば、

我、仏道を成るに至りて、  
名声十方に超え、  
究竟して聞ゆるところなくは、  
誓う、正覚を成らじ。

と読みたい。この場合、「超」は「超、過也」<sup>14)</sup>すなわち「すぎる」と解釈されているのを採用する。『無量寿経』の伝統的解釈においても、この「超」は「超過」とするのであるが、今は文字どおり「超え過ぎてしまうこと」、「とどまらないこと」である。超え過ぎ、とどまらないから、十方の諸仏国土に名声、すなわち名号（名前）が衆生たちによって聞かれない。「究竟靡所聞」ということになるのである。そこでこの第3偈は、法蔵菩薩が誓願を成就して阿弥陀仏となった時、その名号が十方の諸仏国土を超え過ぎて、衆生たちが聞かないことがないように重ねて誓っていることになる。「超」はここでは「超え過ぎてしまうこと」の意とするのである。そこで pravraji (pra- $\sqrt{\text{vraj}}$ ) を  $\sqrt{\text{vraj}}$  または ati- $\sqrt{\text{vraj}}$  に近い意味とすれば、時間的にも、空間的にも「過ぎ去る」という意味になる。

このような見方に立てば、写本どおり pravraji でよいわけであり、あえて na [pra] vraji とする必要はないと思われる。

チベット語訳は、現存梵文と同じようなテキストから訳されたとするならば、この pravraji を訳すのをやめて、意味だけを取って、「名号が称められることとならないならば」<sup>15)</sup>としたから、na に当る語が見出されるのであろう。

最後に拙訳を出しておく。

たとえわたくしがさとの座に到達した<sup>16)</sup>としても、

もしも〔わたくしの〕名号が十方における広大な、多数の、無辺の諸

### 「重誓偈」における一、二の問題

仏国土を速やかに過ぎ去〔ってしまい、聞えないようであ〕るならば、  
わたくしは〔十〕力を得た世間の救護者とはなりません。

### おわりに

以上、「重誓偈」の一、二の問題を検討してみたのであるが、榊本や他のネパール写本を図版とはいえ読むことによって、実際に、写本がどうなっているかが確認できた。これによって、刊本を通してでは明確にすることができない問題を検討することができるということを実例をもって示したつもりである。

このことは、写本、特に榊本のような、すぐれた写本がある場合には、常に実際の写本の形態を把握する意味でも参照されなくてはならないと思うことであると思う。その意味で『集成』の出版は、大きな意義を持つものである。

なお、『集成』所収の「A41写本」(p.151)の4aと5aとが入れ違っていて、4aとあるのが5aであり、5aとあるのが4aであることを付記しておく。

- 1) 藤田宏達編『梵文無量寿経写本の本願文集成—ローマ字本—(附)索引例』(1988年、北海道大学文学部印度哲学研究室)では、「原本または写真版によって34部の写本を参看することができた。」(「はしがき」)と報告されている。  
なお、『本願文集成』を恵与していただきました藤田博士に心から御礼申し上げます。
- 2) 藤田宏達「カトマンドゥにおける *Sukhāvativyūha* の写本」(『中村元博士還暦記念論集 インド思想と仏教』、1973年、228-230頁)参照。なお、榊本を14-15世紀の写本と見る説(足利刊本の序文、『集成』の榊本の解説(「序論」、19-20頁)もある。)
- 3) 「大無量寿経重誓之偈の梵文について」(『小西・高昌・前田三教授頌寿記念

「重誓偈」における一、二の問題

- 東洋学論叢, 1952年2月, 55-67頁), 「梵文無量寿經の偈文」(『印度学仏教学研究』第1巻第1号, 1952年7月, 241-233頁)。
- 4) 「このような」は榑本では, *ekarūpā* となっているが, 第2偈, 第8偈, 第11偈にあるように, *evarūpā* とする。
  - 5) 「これらの最上の諸誓願が」は原文に *imi..... varapraṇidhāna* とある。これを単数形と見る(岩波文庫版『浄土三部経』(上) 260頁) 解釈もあるが, ここでは複数・主格とする。(cf. F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar* (以下, BHS.G. と略称), §21. 69, §8. 101, §6. 12)
  - 6) 「満足させる」は足利博士の「大無量寿經重誓之偈の梵文について」(註(3)参照)の注記③にあるように, 「*ṣiya* は  $\sqrt{\text{ṣi}}$  = to satisfy の為他・三人称・単数・可能法 (optative) の形」と見る。複数の主格を単数の動詞であらわしている点については, BHS.G. の §25. 4 参照。
  - 7) 「なしえなかったならば」は榑本には *kamaya* とあるが, 『集成』所収の光寿会本(B)のように *kareya* (『集成』98頁, 16b, l. 1) とする。
  - 8) 香月院深励『浄土三部経講義』1 (無量寿経講義) 460頁。
  - 9) 同上, 460頁。
  - 10) 同上, 460-461頁。
  - 11) 『浄土宗全書』23, 169頁。
  - 12) 藤田宏達『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』所収の「〔付〕梵文補正表」26頁。
  - 13) 東本願寺蔵版本を底本とする『真宗聖典』(1978年10月, 初版) 25頁の読み。
  - 14) 諸橋『大漢和辞典』巻10, 842頁, 「超」の項。
  - 15) 『浄土宗全書』23, 254頁, 21行。
  - 16) 「到達したとしても」は, 榑本では *rūpagatasya* となっているが, 『集成』所収の, 榑本以外の諸写本, オックスフォード刊本および大谷刊本依用の底本・対校本などの *upagatasya* とする。

畝部 俊英 (本学教授・仏教学)